

待兼山俳句会

第六百八十八回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子
東中乱・向井邦夫・森 茉衣

令和六年六月十七日（月）

会場 大阪倶楽部

会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠・東中乱
東野太美子・向井邦夫・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子
平井瑛三・森 茉衣
出席者十一名＋投句者九名 計二十名

兼題

藻の花・蝙蝠（幹三） 杜若・青嵐（暁子）

当季雑詠 通じて八句

次回

吟行 令和六年六月三十日（日）吟行地 京都府立植物園界限（配布済み別紙参照）

次々回

例会 令和六年七月二十二日（第四月曜日）会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時
兼題 水遊・日盛（幹三） 滝・草いきれ（暁子） その他当季雑詠

選者吟

泰山木の花や人とは小さきもの

幹三

藻の花の小さくゆれて小さき魚

紫陽花に母の小声の記憶かな

藻の花や水にかすかな流れあり

暁子

杜若じつと動かぬ傘一つ

今日終る蝙蝠に空あけ渡し

幹三 選

◎藻の花や水にかすかな流れあり
風やさし立上がりたる藻の花に
青嵐に沸き立つ緑山深し
今日終る蝙蝠に空あけ渡し
蝙蝠の飛び交ふ軒や三昧の音
少年の青年となる青嵐
飛石をこわごわたり杜若
◎青嵐調子外れのチャイム鳴る
◎夏帽子風に飛ばされメキシコ湾
◎杜若色濃くなりて雨意迫る
杜若じつと動かぬ傘一つ
野を覆ふ葉裏光らせ青嵐
藻の花を避くる水棹や老船手
板橋に袖ふれ合ひぬ杜若
杜若ざくりと切りて床に挿す
蝙蝠の何かあるらん旅の宿
蝙蝠の礫かと落つ夕まぐれ
魚見えず藻の花ゆれてゐるばかり
腰まげて歩めば間近か杜若

暁子
太美子
安廣
暁子
安廣
堯子
真知子
輝子
茉衣
暁子
暁子
兵十郎
邦夫
兵十郎
安廣
恵子
太美子
輝子
翠

幹三 特選句講評

藻の咲ける小流れに沿ひ検診車
夕焼けの飛翔たのもし蚊食鳥
◎蝙蝠や我が愛猫はみまかりし
藻の花の片へに打ち寄せられし沼
満ち潮に追はれ戻るや潮干狩
風青し仙人掌高き杉の枝
◎朝風に間近き梅雨のにはひふと
知らざりし君蝙蝠を愛づるとは
藻の花の時に揺らぎて魚の影
花ぎぼし荒き花瓶に咲き上げて
輝子
盛雄
翠
かな子
遊子
安廣
太美子
乱
真知子
兵十郎

・藻の花や水にかすかな流れあり
小さな、そして静かな川に咲いた花である。水のうご
きによって揺れたり沈んだりするさまが可愛らしい。藻
の花の雰囲気がよく描かれている。

・青嵐調子外れのチャイム鳴る

輝子

青々とした風として描かれることが多いが、この取り
合わせは新鮮で愉快。青嵐の違った面を見た思いである。

・夏帽子風に飛ばされメキシコ湾

茉衣

夏帽子はよく飛ばされるが、このスケール感は壮快。

夏帽子の面目躍如。意表をつかれたとも言える。大西洋では大ざっぱだし、紀伊水道ではつまらない。

・杜若色濃くなりて雨意迫る

暁子

感覚が繊細に働くのは湿度のせい、それとも気圧のせいだろうか。ことばの手ざわりとして菖蒲やあやめよりも断然杜若。十七文字の詩ではこういったことにもこだわりたい。

・蝙蝠や我が愛猫はみまかりし

翠

薄暗がりやを飛ぶ奇怪な生き物と、幽界に入った猫との取り合わせに心惹かれた。人智を超えた何かを感じる。

・朝風に間近き梅雨のにはひふと

太美子

自然の中の動物たちにもこういう感覚はあるのかも知れない。梅雨のことは身体が覚えているのである。今年梅雨入りが遅い。それでも確実に梅雨はやってくる。

暁子 選

◎藻の花の時に揺らぎて魚の影

眞知子

◎藻の花の小さくゆれて小さき魚

幹三

夕空に蝙蝠の群れ川渡る

朱美

フロリダの燃ゆる落日花柵榴

茉衣

蝙蝠や切り裂く闇の奥見よと

兵十郎

鋭角の軌跡重ねて蝙蝠舞ふ

安廣

◎ひらひらと蝙蝠舞ひて闇落ち来

安廣

尼寺に小糠雨降るかきつばた

恵子

一番星蝙蝠集ふ大樹かな

輝子

夏帽子風に飛ばされメキシコ湾

茉衣

野を覆ふ葉裏光らせ青嵐

兵十郎

解禁に勇む釣師や青嵐

瑛三

黄昏の背凭硬し蚊食鳥

邦夫

◎藻の花を避くる水棹や老船手

邦夫

重なりて花藻流れに逆らはず

輝子

藻の花や伊吹の近き宿場町

遊子

魚見えず藻の花ゆれてゐるばかり

輝子

ロータリーに大樹蝙蝠とぶ薄暮

輝子

蝙蝠のけものとなりて飛びかかる

幹三

◎全山の樹の鳴る音や青嵐

蝙蝠舞ひ八百八橋の日が暮れる

幹三

言成

八乙女の輪舞たけなは御田植祭

遊子

朝風に間近き梅雨のほひふと

太美子

夕闇に舞ふや蝙蝠母待てば

乱

梅花藻の小流れ美しき湖北かな

瑛三

暁子 特選句講評

・藻の花の時に揺らぎて魚の影

眞知子

・藻の花の小さくゆれて小さき魚

幹三

どちらも藻の花と小魚の戯れる様子を描いた静かで優しい句。もう一句「魚見えず藻の花ゆれてゐるばかり 輝子」もあつた。「藻の花」は水中に生える淡水藻の花の総称。夏になると水面にうす緑や黄色の花を開く。この季節の面白さは、水の流れによつて様々に揺れる花の姿であらう。三句ともそこに魚を加えられ、自然のなかで生物が優しく共生している様を描かれた。なお、池などが一面藻で覆われているのを藻畳というが、これを見たときは感動した。

・藻の花を避くる水棹や老船手

邦夫

渡し舟か、遊船か、或いは漁の舟か、熟練の老船頭は上手に藻の花の中に棹を入れないようにしている。勿論棹に藻が絡むのを避けているのだが、藻を傷めないこともある。先に挙げた句は藻と魚との共生の句であつたが、これは人と植物の共生の句。

・ひらひらと蝙蝠舞ひて闇落ち来

安廣

恥ずかしいが、蝙蝠の兼題が出て、初めて蝙蝠が鳥類でなく、哺乳類であることを知った。「蝙蝠のけものとなりて飛びかかる 幹三」という句が、成程とわかった。掲句の方は鳥のように空を飛ぶ蝙蝠を描かれた。それが飛ぶのは夕暮れであり、明るい世界から闇の世界への交替の刻である。下五の表現に惹かれた。「蝙蝠や切り裂く闇の奥見よと 兵十郎」という句は同じような内容を強い言葉で表現された佳句。

・全山の樹の鳴る音や青嵐

幹三

聴覚と肌感覚が活性化されるようなすがすがしい句。今日の人気の句の一つに「少年の青年となる青嵐 堯子」があつた。私は迷つた末、ただだかなかった。「少年の青

年となる」というフレーズと青嵐はよく合っていて、イメージはピッタリではないか。いい句なのに何故選ばなかったのか、句会の帰りの電車の中で考えた。よく分らなかったが、どちらも具象性のないものが取り合わされているから、情景がはつきり浮かばず、感動しなかったのかと思う。

互選三句

朱美 選

藻の花の時に揺らぎて魚の影	眞知子
一枚の母の絵手紙杜若	和江
一番星蝙蝠集ふ大樹かな	輝子
川沿いに住んでいて同じ光景を見た。懐かしい！	

瑛三 選

杜若色濃くなりて雨意迫る	暁子
ロータリーに大樹蝙蝠とぶ薄暮	輝子
全山の樹の鳴る音や青嵐	幹三
青嵐の我武者羅なエネルギー。正にこの句の感覚。	

和江 選

神宮の苑深閑と杜若	暁子
庭下駄を鳴らして来たる青嵐	恵子
杜若じつと動かぬ傘一つ	暁子
静かな雨、杜若に魅せられた様子がいいです。	

かな子 選

藻の花や水にかすかな流れあり	暁子
藻の花を避くる水棹や老船手	邦夫
蝙蝠や画像検査を終へし帰路	翠
画像検査の結果が気にかかる不安な心証を象徴する蝙蝠。	

邦夫 選

全山の樹の鳴る音や青嵐	幹三
夕闇に舞ふや蝙蝠母待てば	乱
ゆく水に身をまかせゐる花藻かな	暁子
水位や水の流れにより浮かび沈む藻の花を上手く表現。	

恵子 選

泰山木の花や人とは小さきもの	幹三
重なりて花藻流れにさからはず	輝子
フロリダの燃ゆる落日花石榴	茉衣
同じ地で見たあの落日、花石榴とは流石です。	

言成 選

蝙蝠の飛び交ふ軒や三味の音

安廣

魚見えず藻の花ゆれてゐるばかり

輝子

蝙蝠に棲みづらきかなこの街は

堯子

昔の大阪の町は橋が多く、その影が蝙蝠の巣になっていた。

堯子 選

小虫乗せ花藻踏んばる小川かな

安廣

杜若眺めしあとの金目鯛

遊子

青柿を落してゆきぬ青嵐

太美子

少し成長した柿の落果現象、緑一色の景が美しい。

太美子 選

鋭角の軌跡重ねて蝙蝠舞ふ

安廣

藻の花や水面に孔を開け出で来

兵十郎

泰山木の花や人とは小さきもの

幹三

大きな純白無垢な花と比べ、人間は？ 季語が動かない。

輝子 選

藻の花や我が片恋のそつと果て

眞知子

蝙蝠の礫かと落つ夕まぐれ

太美子

かうもりや叱責覚悟にいそぐ道

かな子

どんなドラマがあるのか、いろいろな想像させる句。

兵十郎 選

古池の藻の花時の薄化粧

眞知子

藻の花の光る水辺のピアニシモ

盛雄

少年の青年となる青嵐

堯子

少年から青年への変化は将に青嵐と呼ぶにふさわしい。

茉衣 選

渡りくる風はむらさき杜若

太美子

水鏡天地に伸びる杜若

盛雄

日の暮れを迎へ蝙蝠空に舞ふ

言成

日没前の茜色の空に舞う黒い影のような蝙蝠が印象的。

眞知子 選

杜若じつと動かぬ傘一つ

暁子

藻の咲ける小流れに沿ひ検診車

輝子

蝙蝠や村刻々と暮れゆけり

暁子

暮れ残る空に飛び交う蝙蝠の姿、見なくなつて何年？

真理 選

蝙蝠の飛び交ふ軒や三味の音

安廣

青嵐調子外れのチャイム鳴る

輝子

杜若じつと動かぬ傘一つ

暁子

どんな事情があるのか想像が膨らみます。

翠 選

冷汗かき振込操作青嵐

輝子

板橋に袖ふれ合ひぬ杜若

兵十郎

青嵐調子外れのチャイム鳴る

輝子

外は荒れ模様。時間が来れば古いチャイムは鳴る。

盛雄 選

解禁に勇む釣師や青嵐

瑛三

青空に浮かぶ花藻や友逝きぬ

安廣

ゆく水に身をまかせゐる花藻かな

暁子

花藻が清水を流れてゆく。そのシンプルな美しさ。

安廣 選

藻の花や我が片恋のそつと果て

眞知子

紫陽花に母の小声の記憶かな

幹三

蝙蝠や画像検査を終へし帰路

翠

検査結果への不安と蝙蝠の不気味な感じが重なる。

遊子 選

藻の花や水にかすかな流れあり

暁子

板橋に袖ふれ合ひぬ杜若

兵十郎

蝙蝠や画像検査を終へし帰路

翠

夕闇に蝙蝠の影、検査結果で影の出ない事を願う作者。

乱 選

古池の藻の花時の薄化粧

眞知子

フロリダの燃ゆる落日花柘榴

茉衣

杜若じつと動かぬ傘一つ

暁子

杜若に魅せられた女。さすは日傘か雨傘か。一幅の絵。

参加者自選句

亡き夫の好みし道に杜若

朱美

解禁に勇む釣師や青嵐

瑛三

県北に兜太揮毫の「青嵐」

和江

藻の花の片へに打ち寄せられし沼

かな子

藻の花や深き緑に浮き沈み

邦夫

蝙蝠の何かあるらん旅の宿

恵子

蝙蝠舞ひ八百八橋の日が暮れる

言成

少年の青年となる青嵐

堯子

蝙蝠の礫かと落つ夕まぐれ

太美子

藻の咲ける小流れに沿ひ検診車

輝子

蝙蝠や切り裂く闇の奥見よと

兵十郎

フロリダの燃ゆる落日花柘榴

茉衣

古池の藻の花時の薄化粧

眞知子

花藻揺れ我が影も揺れ溪登る

翠

夕焼けの飛翔たのもし蚊食鳥
風青し杣人高き杉の枝

盛雄

八乙女の輪舞たけなは御田植祭
藻の花の流れに流れなほそこに

遊子

乱

即吟 「擬宝珠」を詠む

即吟も回数を重ねてまいりました。今回のテーマは
民芸風の花瓶に活けられたうす紫色の擬宝珠の花です。

衰へゆく身に優しきや花擬宝珠

暁子

目立ちたる大樹の陰の擬宝珠かな

邦夫

紫の玉静かなり擬宝珠や

恵子

花擬宝珠うすむらさきの涼しさや

堯子

葉も共に活けて欲しげや花擬宝珠

太美子

花擬宝珠夜明の近き空の彩

輝子

擬宝珠のうす紫や長き蕊

兵十郎

擬宝珠の紫の咲きのぼりゆく

幹三

花擬宝珠楽しく句会果てにけり

翠

花入れに所在無げなり花擬宝珠

安廣

花擬宝珠橋にはあらず句座にあり

乱

ひとこと

山田安廣

嵐耕さんの弔句については多くの方のご協力を頂き
有難うございました。

兵十郎さんに草樹会の弔句集と合同で編集して頂いた上で製本してご遺族に謹呈させて頂きました。兵十郎さんと投句頂きました皆様方に厚く御礼申し上げます。

例会後、幹三さんから「今回は蝙蝠が舞ふ」という擬人化が多かった。擬人化は句の鮮度を落とすので避ける方が良く、外国の地名なども同様の傾向がある、又「帯に書かれた杜若」など何かに描かれた絵は季語にならないので注意するように、とのお話がありました。